

# カンダハール

## 全ては神の思し召しのままに

写真・文 牧 良太  
Ryouta Maki



バザール前的大通り 少女を除くと今でも殆どの女性はブルカに身を包んでいる

「仕事がない」それが一番の問題だと言う。彼らのなかにはパキスタン帰りの者もいれば、北部や東部から仕事を求めてやってきたという者もある。「カーブルにも行ってみたのだが、家賃も物価も高くて仕事はない。これから冬になるし、寒いカーブルでとても暮らして行けないよ」そしてカンダハールへ。

「危険? どこにだって危険はあ

市内中心部に程近い、シャヒーダネ交差点。この交差点の南エリアは寄せ場になっていて、毎朝多くの求職者たちが集まってくる。手ぶらの者もいれば、つるはしやシャベルを手にした者、左官道具を持っている者もいる。時おり、自動車やバイクに乗った手配師がやって来ると、それを求職者たちが取り囲み、しばらくあって契約が成立したのだろう、数人が自動車に乗り込み、或いはバイクの後部シートにまたがって現場へと去ってゆく。建設現場での日雇い日当は一五〇〜二〇〇アフガニー程度。三、四ドルだ。それでも週に三日も働けばいい方だと言う。多くの男たちは仕事にはありつけず、一日をチャイハナ（茶店）や路傍で、茶を飲み、おしゃべりして過ごすことになる。通りのレストランはそんな彼らの簡易宿泊所も兼ねている。通りに布を敷いて、路上で夜を明かす者もいる。

「仕事がない」それが一番の問題だと言う。彼らのなかにはパキスタン帰りの者もいれば、北部や東部から仕事を求めてやってきたという者もある。



市内大通り沿いにも破壊の傷跡は残っている





朝、日雇い仕事を求めて集まる求職者たち



幹線道路を頻繁に米軍・外国軍車両が通り過ぎてゆく



市内警備の警官。「ターリバーンが怖くない？」と尋ねると「彼らが俺たちを怖がってるのさ」と強がってみせた

九四年にターリバーンが誕生して以来、カンダハールは彼らの本拠地であり続けた。九六年にカーブルを制圧したあとでも、その指導部はカンダハールに留まり、そこから命令を発していたとされる。

しかし、歴史を紐解くと、カンダハールはターリバーンの生誕地であるよりも以前に、現在のアフガニスタン国家の前身となるドゥッラーニー朝が誕生した地である。アフガニスタン国家の歴史はこの地のパシュトゥーン部族連合体として始まったわけだから、いわばここはアフガニスタンの古都なのだ。そして現在人口規模ではカーブルに次ぐ、国内第二の都市でもある。ただし、カーブルと比較するとその「復興」の格差は著しい。

首都のカーブルでは次々と新しいビルが建設され、一

るよ。カンダハールだって市内は安全だ」  
「カンダハールに行く」と告げると、カーブルの人たちは一様に怪訝な顔をする。生粋のカーブルっ子なら尚更だ。「危険だ、止めておけ。あそこはターリバーンの、テロリストの本拠地だ」  
彼らの懸念は根拠のないものではない。二〇〇一年以降の軍事作戦における外国軍死者のおよそ半数はカンダハール州とヘルマンド州の二州が占め、近年は殊にその傾向が強い。ために米軍のターリバーン掃討作戦の重点地域となっているのだが、対抗する反政府勢力の攻撃も激化している。二〇一一年七月にはカンダハール州議会議長を務めていたアフマッド・ワリー・カルザイ氏（カルザイ大統領の弟）が自宅で暗殺されたほか、政府や軍、警察関係者や、その施設を狙った攻撃、爆破事件が頻発し、路上に仕掛けられた簡易爆弾による被害も増加している。一方、外国軍による反政府勢力への空爆はしばしば「誤爆」を伴い、多数の民間人が死傷している。





アフマッド・シャー・モスク。祈りの場であるとともに、人々の憩いの場ともなっている



チャイハナ（茶店）にて。インド映画のビデオが流れると、たちまち店はいっぱいになった

部では高級車も走り、富が偏重するいびつなかたちではあるが、復興の息吹といったものを感じられないでもない。人々の装いを見ても、年々洋服姿が増え、女性にも全身を覆うブルカではなく、頭頂部をスカーフで覆うだけの人が増えている。ところがカンダハールは何もかもが相変わらず、という感じだ。男たちはシャルワール・カミースに身を包み、ルンギー（ターバン）を巻いている者も多い。女性は圧倒的にブルカ姿であり、少女と老婆以外で顔を見せている者はまれだ。街並も、所々にコンクリート製の商業ビルやオフィスビルを見かけるものの、多くは土壁と日干しレンガで造られた土色の建物で、いまだそこかしこに破壊跡や銃痕を晒している。総じてこの街ではあまり高い建物を見かけない。住宅街でも大通りに面した目抜き通り沿いでも、二階、三階部分が半ば崩落したような建物が散見されるが、人々は破壊を免れた一階部分に暮らし、商売を営んでいる。数年前に修復されたはずの道路は既に所々舗装が剥げ、舞い上がる砂に半ば埋もれている。

「政府が何か造ったって、次の日にはタリーバーンがやって来て壊しちゃうのさ。」親しくなった日用品店主アブドゥル・アジーズはカンダハールの復興具合をそんなふうに冗談めかして言う。「ここには企業もない。工場もない。何にもない。ソ連軍が壊し、ムジャヒディーンが壊し、アメリカが壊していった。破壊だらけだ」

カンダハールで人々と接してみているのは、ある種のおきらめにも似た感情だ。もはや外国による「復興支援」に過度な希望は抱いていない。かといって落胆しているわけでもない。政権がどうなろうと、全てはいつも通り、日常が営まれるのだ。インシャー・アッラー、神の思し召しのままに、と。

近年の治安の悪化によって各種援助機関はカンダハール



夏から秋にかけて、果物は豊富だ。フレッシュジュースを  
飲ませる露店も多い



アフガニスタンの食事にナーンは欠かせない。紛争地でもそれは変わらない

まき りょうた／ジャーナリスト

出版社、テレビ番組制作会社等の勤務を経てフリーランスに。  
グローバル化した世界における国家や社会  
の変化をテーマにイスラーム世界を研究。  
「9・11」後は継続的にアフガニスタンを  
取材。

ルでの活動を縮小させ、或いは撤退を余儀なくされた。  
カーブルを忙しく走り回っていた国連の車両さえ、ここ  
ではあまり見かけない。現在、多国籍軍に代わって市内  
の警備はアフガニスタンの治安部隊に権限委譲されてい  
る。街中は至る所、警官だらけだ。バーザールでは、そ  
ここを自動小銃をさげた警官が歩哨し、通りは機関銃  
を据え付けたピックアップトラックがパトロール。主要  
交差点には土囊でトーチカ状の堡塁が築かれ、装甲車が  
周囲を警戒している。頭上を見上げればビルの上にも  
武装した警官が配備されており、さらに上空には監視力  
メラを備えた白い飛行船が浮かぶ。しかし、どんなに警  
備を厳重にしたところで、反政府勢力による攻撃は止む  
気配がない。

ある日の夕方、町歩きの後にはアブドゥル・アジーズの  
店へおしゃべりに行ったところ、彼がいつになく深刻な  
表情で私に言う。

「今日はホテルに戻って、外には出ない方がいい」市の  
外れでまた爆破騒ぎがあったらしい。



表通りから一本路地へ入ると、土壁とレンガで造られた住宅街が広がっている